

うるま市地名散歩

名嘉山 兼宏

vol.27

赤道・新赤道(アカミチ)

南米へ船旅をしている人が「ただ今、赤道を通過しています」との船内放送で急いで甲板にかけあがり、一生懸命海面を見つめていたが、やがて「赤い線が見えない」と叫んだ。この人は世界地図に表示されている「赤道」が海面にも見えると思ったらしい。笑い話である。

赤道は、市の南西部に位置する。かつては、宮里の屋取集落で赤道十字路口周辺から沖縄市との境界あたりにかけて屋取が点在していた。行政区として大正7年に宮里から分離独立、地籍としては昭和26年に認定された。

戦後しばらくは、平良川からコザ十字路口にかけて赤道の県道沿いは人家もまばらで閑散としていたが、昭和41年に中部病院が建設されると、スーパーをはじめ、各種店舗、会社、病院、アパート、金融機関、公共施設等が建ち並び、発展拡大、人口の増加に伴い新赤道が昭和51年に誕生するまでになった。

赤道は、志喜屋孝信の誕生の地として知られている。志喜屋孝信は、初代

沖縄民政府知事、琉球大学初代学長として戦後の混乱期にあった沖縄の復興、教育に貢献された、本市が誇る偉大な人物である。その功績を讃え、銅像が市役所本庁舎の前面に建立されている。また、志喜屋孝信の業績を語り継ぐとして「志喜屋孝信物語(作:又吉英仁)」として赤道自治会の住民で平成27年に上演された。小学校の学習発表会でも演じられている。また、志喜屋家の横をはしる道路は「志喜屋孝信通り」と呼んでいる。

地名の「あか」と「みち」の意味

県内には、赤道地名が大字2か所、宜野湾市の赤道と本市の赤道があり、小字としては次の6か所見受けられる。

- ①うるま市赤道の赤道原
- ②名護市喜瀬の赤道原
- ③沖縄市登川の赤道原
- ④本部町野原の赤道原
- ⑤北谷町伊平の赤道原
- ⑥沖縄市松本の赤道原

簡単な地名ほどその意味は分かりにくいと言われる。例えば、松田は松の生える田圃、田村は田圃の村ではおかしくなる。赤道も「赤い道」だけでは意味が通らない。また、赤道の赤も必ずしも色の赤とは限らない。地名語の「あか」には次のような色々な意味がある。

一. 地質・土壌から文字通り赤色を意

味するもの。

二. 崖などを意味するもの。久米島の阿嘉など。

三. 仏教で仏にお供えする水「闕伽」、鹿児島島の赤水など。

四. その他開拓地に赤月、暁など。

宜野湾市の赤道は、琉球石灰岩を母岩とする島尻マージからなり、方言アカンチャーで地名の由来もこれによるとされる。

本市赤道は、隣接する沖縄市の登川にかけて赤土が広がっている。「具志川市土地分類調査報告書」は「基質は、赤色土化した粘土を多く含む粘性の土」と記していることから、その地質から「赤土が広がる」と名称されたものだろう。赤道の「道」は方言で土のことを「ミチャ・ンチャ」というので、このミチャが道に表現されて赤道になったと考えられる。また、地名の道には「場所」、「方面」を意味する場合もある。ただ、赤道地名に共通するのは、屋取集落で開墾地ということである。そのことから「開け道」、「開け地」を赤道としたのではないかと疑問も残る。『日本地名辞典(吉田茂樹)』は、「赤月とか暁などの地名は開拓地として佳名として用いたものだろう」と記している。

本市の赤道は、元の宮里一帯がジャール土であったので、屋取一帯の特徴であ

る赤土からつけられたものと思料される。

赤道毛一小

赤道には、赤道毛一小と呼ばれる高い丘があつて、そこは若者たちの憩いの場、毛遊びの場であった。また、近隣の出征兵士や旅人を送迎する場でもあった。この丘からは遠く呉屋辺りまで見ることができたという。



【赤道毛一小(大赤道チンジュ)】

明治41年10月20日の琉球新報に「美里小学校から馬場を縦にぬって赤道へ出た」という記事があるが、この赤道毛一小のところだったのではないか。

戦後、その赤道毛一小一帯は、米軍によって敷きならされ、道路が拡張し、地形が変貌してしまった。ここは、地元の人たちにとっては思い出の地である。その思い出の跡を残そうと郷友會の手によって平成23年に立派な記念碑が建立された。その記念碑は、赤道十字路口から知花向け、県道16号線赤道団地入口を過ぎた十字路の一角にある。